

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	田崎美弥子教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Miyako Tazaki
作成者（著者）	山口, 哲生
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(1). p.5 5.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023_050
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD17996502

田崎美弥子教授送別の辞

山口 哲生

東邦大学医学部医学科心理学研究室

田崎美弥子先生は、2024年3月31日をもって東邦大学医学部心理学研究室教授を定年退職されます。多くの学生・教職員が献身的な田崎先生に支えられ、励まされてきましたが、その中のひとりとして送別の辞を述べさせていただきます。

田崎先生は、1982年3月に慶應義塾大学文学部心理学科をご卒業され、その後、米国カンザス大学大学院人間発達学部で修士課程、博士課程を修了されました。IBM研究所や世界保健機関（WHO）でご活躍された後に東京理科大学理学部准教授を経て、2009年4月に本学医学部心理学研究室に教授として着任されました。

先生のご経歴や研究テーマの選択基準には常に「研究の成果が人の役に立つのか」がありました。博士論文のテーマとして取り組まれた「言語獲得における刺激等価性」は、英語の習得に苦勞している留学生の役に立ちたいという思いが研究を始めるきっかけとなったそうです。また、WHOで従事されたQOL（quality of life）の研究では個人のQOLを測定する調査票を開発され、日本人のQOLは国際的にかなり低いこと、うつ病や統合失調症患者であっても主観的な測定が可能で健常者よりもQOLが低いこと、顔に痣や傷がある方がメイキャップ製品を使うことでQOLが向上することなどを明らかにされました。

東邦大学に着任されてからは、WHODAS（世界保健機関障害評価基準）日本語版の開発研究やニューロフィードバック（neurofeedback）の研究に取り組まれました。WHODASは、文化的影響を除いたうえで健康と障害の程度を測定するツールです。日本語版調査票開発研究では、疾患があっても主観的健康感が高い方は積極的に運動や社会参加をされていてQOLが高いことがわかりました。また、2010年頃からは新たな研究テーマとしてニューロフィードバックの応用利用にもいち早く取り組まれてきました。今では日本国内でも広く聞くようになったニューロ

フィードバックという言葉ですが、当時は一般への認知度は低く、また正しい利用方法なども理解されていませんでした。そこで田崎先生はニューロフィードバックの第一人者であるオーストラリア応用神経学会前会長のモッシュ・パール博士を招聘して、2013年より定期的にセミナーや勉強会を開催されました。その際に田崎先生は堪能な英語を生かして、セミナーの同時通訳やテキストの翻訳なども務められました。さらに2016年にはニューロフィードバックの普及を目的に一般社団法人臨床ニューロフィードバック協会を立ち上げられ、現在も後進の育成に力を注いでいらっしゃいます。

正義感が強く、優しさと芯の強さを持ち合わせた先生のお人柄は多くの学生から慕われており、様々な問題を抱えた学生が田崎先生の研究室を訪ねる姿を目にしました。特に入学直後の1年生の中には新しい環境に馴染めず、人間関係に苦勞する学生も多く、時には学生が先生の研究室に長居することもあったそうですが、それでも先生は親身になって話を聞き、アドバイスをされていました。授業や研究、大学の業務に追われながらも、いつも学生のことを第一に考え、時間を惜しまず学生に寄り添いながら相談に乗るお姿は尊敬の念に堪えません。そんな先生のもとには学年が進み、卒業してからも訪ねてくる学生が後を絶ちません。

小柄で華奢な先生ですが、合気道や空手の有段者であり、また、以前は大型バイクにまたがり、ツーリングに出かけることもあったそうです。これまでは多くの学生や先生を頼られる方に心を配って寄り添ってこられた分、これからはご自身のために時間を使いゆっくりにお過ごしください。最後になりますが、長きにわたるご指導とご貢献に心より感謝申し上げますとともに、先生のご健康を心から祈念いたしております。本当にありがとうございました。